ヨーロッパの旅（三）

平井信義

今回の旅で、われわれ夫婦の訪問を最も喜んでくださったのは、誰だったろう。それは、われわれを招いて下さったベンホルト・トムセン教授夫妻であった。「よかった、よかった、お二人で来ることができて！」と、教授夫妻は、こもごも言って下さった。何回も繰り返して言って下さった。

実は、最初のうち、家内といっしょにいくことができないかと心配していたのである。向うで出してくれる滞在費は、二人で生活するのにじゅうぶんであるが、二人名義の招待になっていないということで、外務省が家内の旅券を許可しないという話であった。僕は、がっかりした。この前の旅行の時、どこにいっても淋しい思いがしたのは、家内がいなかったからである。美しい景色やゆかりのある建物を見るたびに、家内に見せたいな——と思い、その日がいつか来ればと願ったものであった。

そこへ今回の話。ぼくは、いよいよその日が来た——と、家内を案内する旅の道順をあれこれと考えた。ところが、いよいよ旅券を申請するとなると、きびしい隘路。ぼくは、落胆した。初めは張り切っていた家内も、「いいわよ、無理をしなくても。またの機会もあるでしょうから……」といちはやく断念しようとしている。ぼくは、奮起した。そして、教授あてに手紙をかき、総ての保証をお願いしたのであった。

普段は筆不精で、なかなか手紙をよこさない教授から、折り返し返事がきた。そして、総ての保証を教授がして下さるという書類が同封してあった。「お二人でおいで下さることを、我々はこころから望んでいます！」

われわれがケルンに着くと、早速その晩に、家へ食事に来て

ほしいという教授の要請である。既に、そのことについて奥さまとの打ち合わせができているという話だった。しかし、到着の日、われわれはさすがに疲れていた。殊に、飛行機でデュッセルトルフについた時に重い荷物を持ったまま雨に打たれたり、ケルンでホテルを探すのに心配があったりして、心身ともに疲れていた。そこで、私は卒直にその旨を言って、お断りした。

「全くその通りだ。われわれも日本に着いた時、非常に疲労を感じたものだ。ゆっくりお休みなさい。特に、奥さんに疲れがでないようにね。明日の昼、ご案内しましょう。とにかく、お二人できて下さったことは、本当にうれしい。こころからうれしい。大学の中に、泊る部屋も予約してあるから、明日は移転して、そこで休んで下さい。何かお望みがあれば、何でもいって下さい。すべて医局長のハッハマン君に話してありますから」――到れり尽せりであった。

翌日は、雨もよいのうすら寒い日であった。ハッハマン君が迎えに来てくれて、彼の自動車でホテルから大学内の客員室へ移転した。事務の手続や荷物の整理が終ってから、家内は和服に着替えを始めた。教授のお宅への第一回の訪問が約束されている。奥様も待っていて下さる。そう思うと、胸が踊る。帯を締める手伝いをしながら、和服姿をみた教授夫妻が、どのようにいうだろうかと、考えてみたりした。帯が終ると、家内は足袋をはき、草履に足をつっ込んだ。

大学病院までの道を六、七分歩いて門をくぐると、既に自動車のそばに教授が立っているのが見えた。私が手をあげると同時に彼の方でも気がついて、手をあげた。駈けるように近付いていくと、彼もこちらに歩みを寄せる。そして、家内の方に近寄って、手を差しのべた。固い握手。家内の差し出した手を、両手につつんだ。私との握手になった。

「どうもお待たせしてすみません。家内が着物を着るのに手間取ったものですから…」

「いいえ、少しも。奥さんが日本の着物で来て下さって、何よりもうれしい。すばらしくきれいだ。私の家内も、それを望んでいましたから、どんなに喜ぶことでしょう。どうぞ、自動車に乗って下さい。早速、でかけましょう。」

私は家内の手を支えて自動車にのせその脇に坐った。教授運転の車は、早速動き出した。

「新しい建物がずいぶんふえましたね」と、私は七年前の留学のときを思い出す。

「すっかり変ったでしょう。当時はまだ爆撃のあとがたくさんに残っていましたからね。あなたが、ここを去られてから、もう七年にもなりますかねえ。ついこの間のような気がしてい

るが……」

「まさに七年になります。しかし、先生には昨年お会いしたので、続けてお会いしているような気持です。」

「日本での三週間は、私どもの人生の最上の時といえましょう。本当に楽しい時を過ごしました。徳島の学会で、奥さんにお目にかかったのでしたね」と教授は運転をつっけながらいった。「今の話を、奥さんに通訳してあげて下さい」と、ちょっと振り返ってウインクした。それは、「どうそいたわってあげて下さい」というサインのようであった。私はそれをした。家内か私の通訳にうなずくと、教授はうれしそうに、また、ウィンクをした。

教授のお宅は、病院から一〇分足らずのところにあった。そこは既に郊外に当る。そして、シタットワルト（町の森）の近くであった。通りの並木のほかに、大きな木がそこここにそびえていた。人通りの少ない静かな家並が続いている。教授を先頭に、石の段を数段あがった。玄関口である。その横の壁に並んでいる呼鈴を押すと、かけおりるようにして、教授の息子さんか戸をあけてくれた。

「さあ、どうぞ！」

「どうもありがとうございます。」

家内を先頭に、戸口に入る。そして、家内の差し出した手を握って、息子さんは家内との挨拶を交わした。私との挨拶が終ると、とんとんとんと、二階に上っていった。二階の幾間かが教授の家である。ちょうど七年前、この家を訪れた時のことを思い出した。酔うほどに、「船頭小唄」をうたったのが、この家であった。

二階の上り口のところに、既に奥さまが大きなからだを乗り出して待ち構えておられた。思わず私の手があがる。懐しいお顔だ。ちょうど一年半前と変りがないおだやかな顔だ。ほくは、この顔に接するたびに、ふところに抱かれているみたいに感じたものだった。教授に続いて家内、そして私「最後に令息が二階にのぼりついたとき、私の足は感激でふるえるようであった。いよいよ第二の故郷西ドイツの土を再び踏んだ」という実感がこみ上げてきた。

紱たんのしきつめてある部屋　その周囲の壁は本棚と本とでいっぱいになっていた。教授夫妻は、家内をかかえんばかりに両側から寄り添って、その部屋の南の隅に案内された

「どうそ、気楽にして下さい。くつろいで下さい」と奥さまが言われる。「私どもは、日本ですごした三週間のことをしばしば思い出します。あなた方も、二ケ月間のドイツでの生活を、じゅうぶんに味って下さい。あなた方の人生の、最上の日になるようにね。」

私どもがソファに腰をおろすと、令嬢が現われた。家内との握手。

「ようこそおいで下さいました。両親は、あなた方がおいでになるのを、毎日のようにお待ちしていたのですよ。」――この令嬢のことばを、私は家内に通訳した。家内が頬笑むと、令嬢も頬笑み返して、再び手を握り合った。

「あなたは、いま、何をしておいでなのですか？」

「大学を出て、大学に残って勉強しています。専門は国文学です。十八世紀の文学について研究しています。普段はベルリンにおりますが、いまは休暇で帰って来ているのです。」

「私も、ちょっと独逸文学を勉強しました」と言うと、

「平井君は、ゲルマニスト（独逸文学者）なのだよ」と教授が口を出す。

「ゲルマニストではなく、ゲルマニストになろうとしたのです。」

「カロッサを勉強したのでしたね。」

令嬢は、目を大きくした。

「カロッサのものを私は読んでいません。しかし、現代に生きる立派な詩人だときいています。」

「私は、最初、ティークの童話に興味をもち、ロマンティーク（浪漫派）の勉強をしようと思っていました。しかし、カロッサの『医師ビュルゲルの運命』を読んでから、すっかり心を牽かれたのです。そして、医師になろうと決心するようにもなったのです。」

教授が口をはさんだ。

「私は、リリエンクローンの子どもについての詩が好きです。ときどき、読み返しています。」

「そうですか。それで、外来の壁にかけてあるのですね、子どもの遊んでいる様子をうたった詩が……」

「もう気がついておいでしたか。その通りです。いい詩でしょ。最も好きな詩です。」

そういいながら目を細める教授の顔を見詰めながら、令嬢はうなずくようにした。父親の趣好が自分の専門になった――とでもいうのであろうか。二人がこころをいたわり合っている様子が、その目差しから汲みとれて、ほのぼのと暖いものを感じた。

その時、奥さんが入ってきて、教授の肩に手をかけるようにして、食事の用意ができていることを告げた。

「では、食事にしましょう。あちらへ席を移動させましょう。」

教授は、家内の方に手を差し伸べて、席を立つように促した。家内が立ち上がると、更に肩に手をかけるようにして先を

歩かせた。こうしたしきたりにまだじゅうぶんに慣れていない家内は、ちょっとためらったが、しかし、そのためらいを教授は受けとめて、

「日本では、男性が先にいくような習慣でしたね」と私に目くばせをした。それを通訳すると、家内は思い起こしたように毅然として、先きに歩き出し、そのあとに皆が従った。北の窓に接した隣の部屋に入る。そして、座席に家内が坐ると、右へ令嬢と奥様。左へ教授とぼく。末席へ令息が坐った。令息は、私どもが話をしている間、母親である教授夫人を手伝って、食卓の用意をしていた。私どもが席に坐り終えたとき、バターナイフがでていないのに気付いて、再び立ち上がり、それを持って来た。

「では、カンパイをしましょう」

と、カンパイ（乾盃）を日本語でいって、葡萄酒の壜を教授が取り上げる。正式のテーブルにはビールは出ない。多くは、葡萄酒である。細長く緑色をした壜の口から、コルクの栓を抜きとる。そして、僅かな量を自分のカップに注ぐ。それを舌先で味うようにする。

「いい味だ！」

教授は、自分のカップをおくと、再び葡萄酒の壜を取り上げて、皆のカップに注いで廻った。

「奥さんは、葡萄酒がお好きですか？」

それを通訳すると

「私はいただけないのです」というように家内は手を振る。

「とてもいいお酒ですから、ちょっとでも味ってみて下さい。では、乾盃！」　私は、トイツ語で

「フロースト（乾盃）！」といった。

一と口飲むと、カップを持ったまま、目と目を合わせる。それが、この国での習慣である。じっと、見入るようにする。そして、更にもう一と口飲んで、再び目を合わせたりもする。うまい葡萄酒であった。

「何年の葡萄酒ですか。」

「一九五九年のです。この年のは、とてもおいしい。ライン酒です。」

ぼくは、更にカップを持ち上げて、飲み乾した。

雨模様であった空が、晴れてきたらしい。窓の外が明るくなった。何の鳥かわからないが、チッチッと啼き声を立てている。何羽かの群らしい。飛び交う羽音と窓近くかすめ飛ぶ影が走る。

「静かですね」と、口を切ると、

「りすも来ますし、鳥はまだたくさんにいます。森の近くだからでしょう。」

「東京は、このようなところがだんだんになくなっています。」

「しかし、国立博物館にいった時は、静かでしたね。あのミューゼアムは、日本で最も印象深いものでした。あのとき、あなたに頂いた美術の写真帳は、繰り返し繰り返し見ています。あそこに案内して頂いたのは、本当によかった。」

「私も」と夫人が合槍をうつ。「非常に強い印象を持っています。殊に、古い時代の人間の像——何といいましたか……」と、こめかみに手を当てて、その名を思い出そうとしておられる。

「はにわ——でしょ。」

「そうそう。はにわです。非常に心を打つものがありますね。」

その時、初めて令息が口を開いた。

「両親は、その話をよくしています。非常に気に入っています。」

「あなたもどうぞ、日本へいらして下さいませんか。ご案内しますから……」

「いきたいとは思うのですが、あまりに専門がちがうから……。私は、スペイン語をやっています。言語学が専門なのです。そこで、先日はスペインにいきましたが、日本は遠い…」

「でも飛行機で二十時間です。今日発てば、明日ついてしまう」と私。

「私は、行くなら船でいきます。船旅は落ち着いていて、方々の国の文化を楽しむことができますから……」

「たしかに、飛行機の旅には、味いがありませんね。カロッサにも、飛行機は一足飛びにこの地球の空を飛んでいくが、大地に足をつけ一歩一歩あゆんていく我々の生活に味いの深いことを詠んだ詩がありました。」

私は、再び葡萄酒のクラスを手にとって、日の高さまであげ、教授夫人の目差しを見詰め、それから転じて、教授、令息、令嬢と、最後に家内と目を合わせてから、クラスに唇をつけた。香のよい葡萄酒が唇にしめり、舌にのり、喉もとをすぎていく。一口、二口、……私は、クラスを唇から離さないで、飲みほした。

窓の外ではチチ、チチ、と相変らず鳥が啼き交している。淡い日射しが斜めに入り込み、くすんだ緑の壁に当たる。その日射の中で、小さなほこりのいくつかが、舞い上がり舞いおりていた。

チチ、チチと軒ぎわに、再び鳥の声が起って、再び羽音とともに遠のいていった。と同時に、いま自分たちは、日本を離れて、トイツという国にいるのだ——という感激が、胸の底から衝き上げてきた。

（つづく）